

琉球音楽の旋律における「拡大」と「縮小」 ——「作田型の歌曲」を中心に——

マット・ギラン

琉球音楽において、歌曲の節名（曲名）に共通の言葉が用いられ、それらの曲が類似性を持つ例は幾つか存在する。例えば、節名に「作田」がつく歌、《作田節》、《早作田節》、《伊集早作田節》、《揚作田節》、《中作田節》はその代表的な例である。本論文では、これらの「作田」がつく歌曲を「作田型」とし、琉球古典音楽における旋律の類似性を考察し、その作曲プロセスを明らかにすることを目的とする。

日本本土とアジア大陸の間に位置する沖縄での最近の音楽研究では、琉球音楽における中国の影響が注目されている。東アジアや東南アジアの音楽に、旋律の基本的な音を保ちつつ、旋律全体を拡大、または縮小する演奏法が広く存在する。中国音楽における「放慢加花」(*fangman jiahua*)はこの演奏法の代表的な例である。また、ジャワ音楽の「イロモ」(*irama*)、タイ音楽における「タウ」(*thăw*)も、ある旋律を拡大または縮小するプロセスであり、東（南）アジアの音楽文化の一つの要素を示しているといえる。

これら東アジアの音楽理論の他に、欧米の民族音楽学では、バヤード、ブロンソン、シーガー等の研究者により 20 世紀半ば頃から提唱された「Tune Family」(旋律系)理論を参考にする。その上で沖縄の伝統音楽には、中国や東南アジアにおける「拡大」、「縮小」と同様な作曲法が存在すると論じる。しかし、「作田型の歌曲」は拡大縮小のプロセスを示しているものの、単なる倍率ではないことも明らかである。本論文では琉球音楽における拡大縮小は、旋律の基本音を守りながら、ある程度自由に旋律を伸ばしたり縮めたりする作曲プロセスであることを検証する。